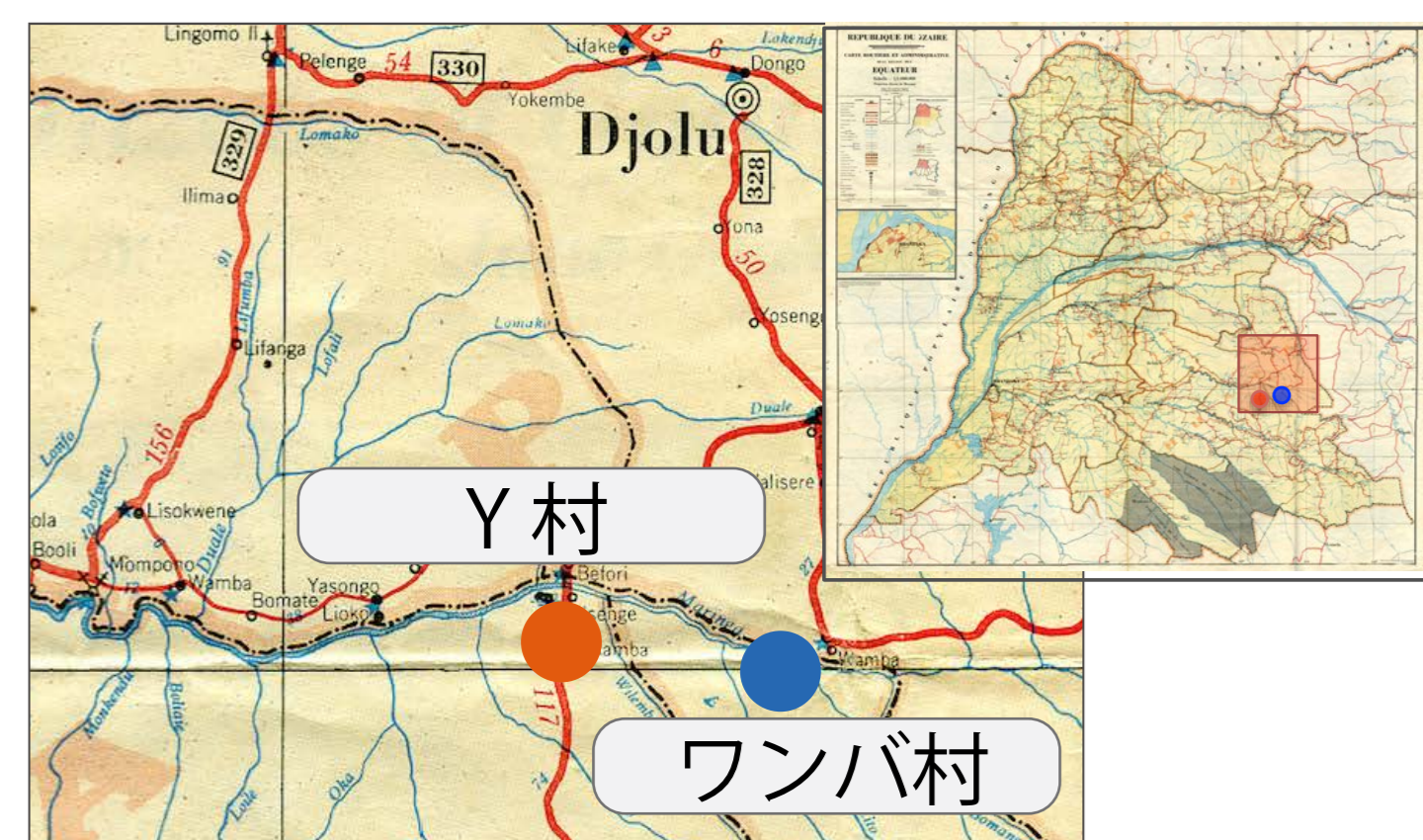


### 背景と目的

コンゴ民主共和国ルオー学術保護区内のワンバ村には、ボンガンドという民族が住んでおり、彼らは古くからボノボを摂食回避してきた。そのため、保護区制定以前からボノボと地域住民が共生関係を築いて来た(加納 1987)が、保護区から 80km 離れた Y 村では、同じボンガンドでありながら、特に 20-40 代の男性の間でボノボへの認識がワンバ村とは大きく異なっていることがわかった。本発表では、2 つの村を比較しながら、積極的な保護活動が行われていない Y 村でのボノボを取り巻く環境について報告する。

### 調査地と人びと



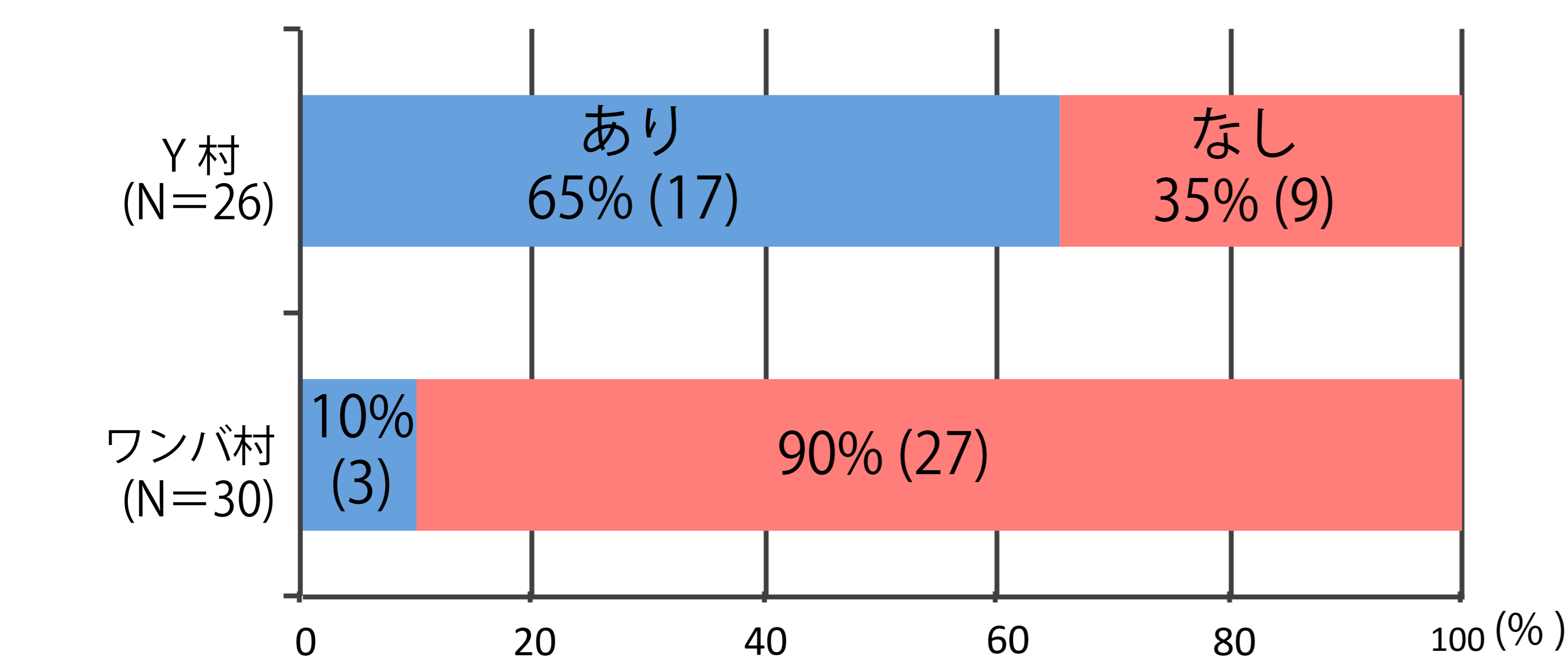
- 調査地●
  - 赤道州ルオー学術保護区内ワンバ村
  - 赤道州 Y 村 (保護区や国立公園の制定なし)
- 民族集団ボンガンド●
  - 45-50 万人
  - 焼畑農耕民
  - ボノボを食べない民族集団
  - ボノボと人間に関する伝承が多数ある。



### 方法

- 2 村での 20-40 代男性への聞き取り
- ワンバ村 (30 人)、Y 村 (26 人)
- 現地調査期間：2014.11-2015.03、2016.07 (約 105 日)

### 結果 1 ボノボ肉の摂食経験



Fisher's exact probability test  
p < 0.01

### 結果 2 ボノボ食に対する親族年長者からの注意

親や祖父母からボノボを食べることについて言及している語り

ワンバ村：12 人

- 【例】
- 先祖代々食べるなど言われている。
  - 両親に食べるなど言われている。
  - ボノボを食べたら死ぬと言われた。
  - 尻がないからボノボは動物ではない。だから食べるなど言われた。

Y 村：14 人

- 高校生の時狩猟したら父親に強く叱られた。それ以来殺していない。
- 父には食べるなど言われたが食べる。
- 父は私がボノボを食べることを嫌がっている。
- 家で食べると怒られるので友人の家で食べる。

### まとめと今後の展望

- ボノボ摂食経験者数を比較すると、ワンバ村は 10% に対し Y 村は 65% と、半数以上に摂食経験が見られた。
- しかし、Y 村も同様にボノボを摂食する若者から、父親や祖父がボノボ肉摂食への強い嫌悪を持っていることが語られた。
- にも関わらず、Y 村では両親が食べないと答えたインフォーマントの半数以上 (22 人中 13 人) が食べると答えた。
- 人間とボノボにまつわる伝承の認知が、摂食回避意識を強めていたと思われていたが、2 村の伝承認知率に差は見られず、伝承と摂食回避の直接的な関連性はないようだ。

【ボノボを食べる息子、ボノボを食べない父親】  
保全活動が行われていない Y 村では、父親世代まで受け継がれてきた人とボノボの関係が大きく変容しつつある。今後は、ボノボの摂食を行なっている若者のライフヒストリーから、そのきっかけ、経験を分析し、ボノボへのタブーが失われつつある要因を明らかにしていきたいと考えている。

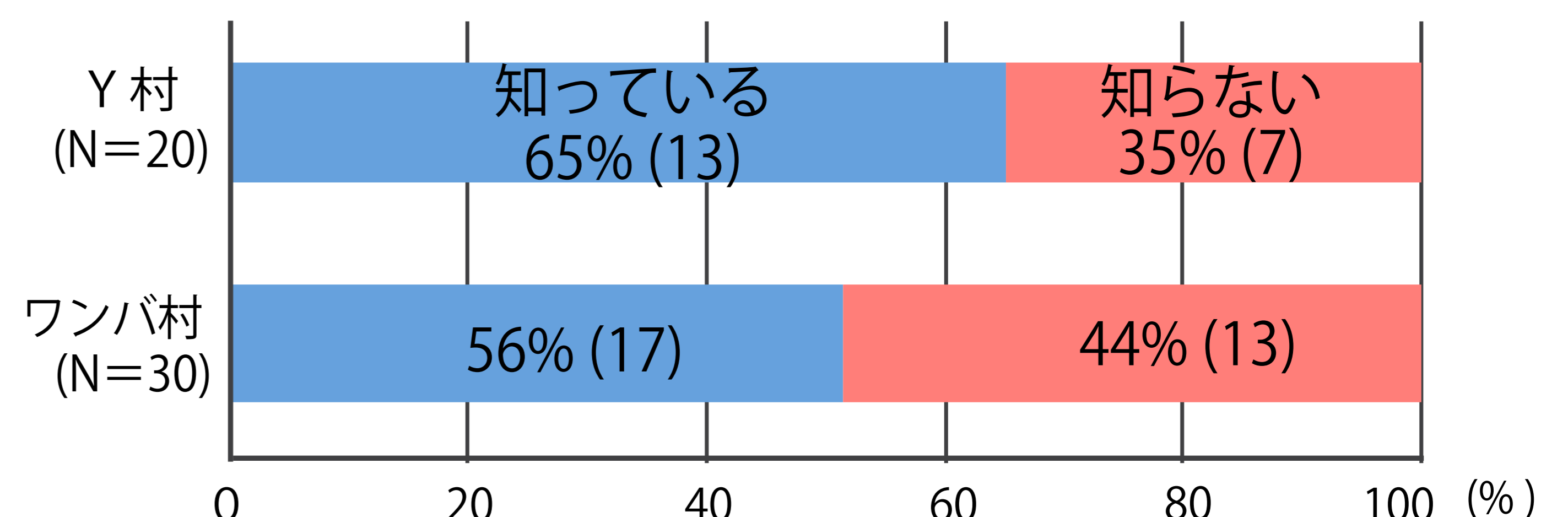


<http://a-z-animals.com/animals/bon>

### 結果 3 Y 村でのインフォーマントと両親の摂食習慣との関連性

		インフォーマント (調査協力者)		合計
		食べる	食べない	
両親	食べる	4	0	4
	食べない	13	9	22
		17	9	26

### 結果 4 ボノボの伝承認知率



Chi-squared-test  
 $\chi^2 = 0.087$  p > 0.05 n.s

### ボノボ = 狩猟対象動物

Y 村で調査を行なってみると何人もの猟師や村人から、現在もボノボの狩猟を行なっているという証言を得た。ボノボはコンゴ全土で保護動物であり、狩猟者は重い罰金、または禁固刑が課せられる。しかし Y 村では、村長や集落長にボノボの頭部や大腿部を贈呈すれば逮捕を免れるという。



<http://www.bonoboincongo.com/2009/07/05/hunters-pull-back-from-lomamis-bonobo-forests/>